

---

# 惨殺！デュラ娘

ソード鉄道員

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

惨殺！デユラ娘

### 【Nコード】

N3935BA

### 【作者名】

ソドー鉄道員

### 【あらすじ】

幻想郷に見習いデユラハンの女の子が幻想入り？

名前が単純で天然ボケ抜群のデユラ娘がドタバタ成長していく笑い  
と感動？の成長日記、イカ娘とは関係ない。

断じてイカ娘とは関係ない（大事な事なので2回言いました）。

惨殺！0話「やってきた見習いデュラハン」（前書き）

ゆっくりれいむ

「どうも、どうも、ゆっくりです。」

さて始まりました、惨殺！デュラ娘。

と言うか、第0話から使いまわしかよ……。

あ、言い忘れてました」

\*この小説は東方project、トランスフォーマー、ローゼンメイデンの二次創作小説です。

キャラのイメージや設定が大きく崩れる事がございます故、ご了承願います。

後、オリ主なので、苦手な方はブラウザの戻るボタンを押してください。

ゆっくりれいむ

「それが苦手じゃない人は……ゆっくり読んでいってね……！」

## 惨殺！0話「やってきた見習いデューラハン」

「まったく……ゆっくりはいつもいつも……」

縁側で愚痴を呟いているのは、ゆっくりれいむの主である霊夢だ。それもそのはず、普段ならのほほんと茶を啜っているのだが……いつもに増して不機嫌である。

「まあ、お前に似てるいからじゃないか？」

そしてその愚痴を聞いているのは、ゆっくりまりさの主である普通のこそ泥

……じゃねーや、普通の魔法使いの霧雨魔理沙だった。

「オイ、誰がこそ泥だよ？」

「すみません、つい……」。

「誰に話してるのよ？」

「気にするな！」

いきなり独り言を言う魔理沙に対して呆れた顔をしながらいう霊夢だが、気を取り戻して愚痴が続いた。

愚痴の内容は、もちろんゆっくりれいむに対する愚痴だった。

彼女は霊夢が戸棚にしまったおいた高級な饅頭が変化した妖怪であるが……性格と表情は違えど見かけからして霊夢そっくりである。

いつものように魔理沙はその愚痴を軽がると「はいはい」と返事を  
をする。

だが、霊夢の愚痴はまだ収まらなかった。

「掃除はサボるわ、着替えを覗くわスカートをめくるわ!。」

いくら楽園の素敵な巫女でも我慢の限界つてもものがあるわよ!おかげで参拝客が来ない……」

「いや、参拝客が来ないのはゆっくりのせいじゃないぜ…… (汗)」

最後の愚痴に関しては魔理沙の言うとおりゆっくりれいむとは関係が無い。

参拝客が来ないのは、ここ博麗神社は幻想郷の最東に建てられているからだ、周囲には妖怪が出る森なので…行こうにも行けない。だが霊夢の人間・妖怪問わずに惹きつける性格にも参拝客が来ない理由もある。

そのおかげで博麗神社には全く、里の人間の人つ子一人は来ない…… 来るとしても妖怪や賽銭箱に石ころや蛙の死骸を入れる悪戯好きな妖精だけだ。

更に最悪なことには、自分の顔をした妖怪饅頭「ゆっくりれいむ」が居候してしまったことで霊夢の悩みは増えるばかり……。

「ああ…… あんなに美味しい美味しいお饅頭が…三日間でゆっくりに変化したのよ?。」

とっても高いお饅頭なのよ…… あんこがとろつとしてて頬つぺたが落ちそうぐらいだったのに……」

そう言つて霊夢は泣きながら魔理沙を揺すった。

未だに饅頭の味を忘れられないらしい。

魔理沙は揺すられながら、「まだ饅頭のことを嘆いてたのか……」と心の中で呟いた。

ちなみに、彼女の家にも自分の顔をした妖怪大福のゆっくりまりさが居候している。

あまり普通の味だったので、魔理沙は食べ残したまま二日で変化した妖怪である。

……と、その時である。

「号外です！」

声とともに少女は新聞をばら撒き、霊夢たちのところへ急降下した。

「おはようございます。清く正しい命射丸です、今日の号外です」

そう言つと少女……他の妖怪よりもプライドが高いとも言われる鴉天狗の一人の射命丸文は敬礼しながら名乗つて霊夢に文々。新聞を渡す。

霊夢は新聞を受け取ると早速記事を読んだ。

「えーと何々、『衝撃！幻想郷に新たな訪問者！』……また外来人が来たつて事？」

「はい、どうやら今度は人間の少女つぽい人なんです」

「つぽいつて何だよ……」

新聞を読んで、また外来人が来たと思うと霊夢はため息を吐く。ここ最近、外の世界から幻想郷にやってくる者が数多くあった。

去年はソー鉄道一号機関車のトーマスがこの幻想郷にやってきてしまったことがあるからだ。

だけど、なんとか彼は無事にソー鉄道へと帰っていったが、今

度は誰が来るのか…いや、誰が連れてこられるかわからない。というより、ここ最近は人間ではなく人外系ばっかだった。

ゆっくりれいむだけでもイライラしているのに外来人が来たのにモイライラする。

新聞を読み終えた霊夢は折りたたんで、テーブルに置いた。

普段なら読み終えたらゴミ箱に投げ捨てるのだが、これを見た文は魔理沙はありえない表情で見ている。

「お、おい霊夢！お前どうしたんだ！？」

「は？何がよ？」

「あやや！？霊夢さんにしては珍しいですよ！？、新聞を捨てることに定評のある霊夢さんが！」

「どんな定評よ！！、この新聞はゆっくりが読みたいからとっておくだけよ！」

「アレ？ゆっくりさん、まだ帰ってこないんですか？」

文はゆっくりれいむの事を聞くと霊夢は縦にうなずいた。

この文々。新聞を楽しみにしているのは紅魔館の主であるようにじよ……じゃなかった、吸血鬼レミリア・スカーレットとゆっくり達であった。

特にすごく楽しみにしているのはゆっくりれいむである、文々。新聞を購読のしているはゆっくりれいむ一人だけ。

料金もゆっくりれいむが払っている、外の世界で実況しているのへそくりをどこかに隠しているからである。

「まったく、私に黙って購読なんて居候の分際で何考えてるのよ」

「まあいいじゃないですか。こうして購読してくれる人が居ますし

…」

「それはあなたにとってはでしょ……それにゆっくりは人じゃないでしょ」

そう突っ込むと霊夢は「あゝあ」となだれ込む。

ちなみに文とレミリアのところにもゆっくりが居る……しかしこちらら饅頭ではなく肉まんやあんまん、ピザまんが変化したものである。

「でも、なんかかんやでゆっくりと仲いいじゃん」

そう言いながら霊夢の隣で酒を飲んでいたのは上級妖怪の鬼の少女……違う違う、少女……小さな百鬼夜行の伊吹萃香だった。

「なあ！、す、萃香!？」

これには霊夢は頬を赤くして動揺する。

そんな鬼の発言に敏感に聞いた文と魔理沙は質問をする。

「ほほお、ゆっくりさんと仲がいいのですか……」

「萃香、私にも詳しく聞かしてくれ!」

「そうだねえ〜……最近、ゆっくりの奴が帰ってこないときに早く帰ってこないかな」と心配していたし……

「寝言で「ゆっくり〜」と言って……」

「わーわーわーわー!……!」

鬼は嘘が嫌いなので正直に話す、霊夢は顔を真っ赤にして両耳を塞ぎながら叫び続けた。

こんな霊夢の姿を見るのははじめてなので、文はこっそり写真を撮った。



萃香の話聞いて霊夢を見ながらニヤニヤする魔理沙。

「ちち、違うのよ！ご飯が冷めちゃうからそう言ってるだけよ！それにあいつが居ないと枕代わりが……」

霊夢は動揺しているのか何を言ってるか自分でさえわからなくなっってしまった。

「おお、ツンデレツンデレ」

「ツンデレ言っうなー！！」

とどめにウザい顔をしながら文が言うと、霊夢は顔を更に赤くしながら怒鳴った。

もう湯気がもわもわと出ている。

「でもね〜、ゆっくりだったって霊夢や神社のことを思って参拝客が来るように努力しているよ」

「萃香ア！あんたもいい加減に……って、えっ？」

もう一度怒鳴ろうとしたが、ゆっくりが神社のためにがんばっているという事を聞いてピタッと止まった。

更に萃香は話し続ける。

「あいつは結構、怠けているけど、ちゃんとこの神社や霊夢の事を思っているんだよ。」

私が屋根の上で昼寝していたときに、ゆっくりが参拝客を連れてきてるのを見たんだよ」

「ほほう、私達の見えないところでそんなことをしていたんですね」

「ゆっくりって結構働き者だね……あ、そういえばこの前の話だ  
が……」

今度は魔理沙が話し始めた。

その話は魔理沙がいつもの様に紅魔館に侵入し、大図書館から本を強奪した後に神社の石段を登っているときだった。

彼女は、森の中で何やら怒鳴り声が聞こえてきたので、様子を見てみると……。

「アレはゆっくりじゃん、って何だあの妖怪共？」

森の中では、ゆっくりれいむが2匹のとても大柄でごつい妖怪たちと話していた。

だが、何やら様子が変わった、ゆっくりれいむが何か怒っているのだ、もしか戦うのか？と魔理沙は首を傾げたが……。

「この……バカッ！！！」

一人の妖怪を殴った。

あんなにごつい妖怪がいても簡単に小さいゆっくりれいむに殴り倒されたのはありえないが、

彼女は霊夢のものそっくりなので能力も強さもちょっとアレンジしてあって強いのである。

殴り倒した妖怪の胸倉を掴んでまだ怒鳴っていた。

「アレほど参拝客には手を出しちゃだめって言ったでしょうが！」

「す、すみませんゆっくりさん。俺……どうしても子供らに飯食わせたかったんですよ……」

「私がキノコ料理を作ってあげるわよ！。別にあんたが退治されても私はどうでもいいのよ」「

そう言ってゆつくりれいむは妖怪を突き放した。  
どうやら、この妖怪は自分の子の為に参拝客を襲ったのである。  
それを見た毛玉から聞いたゆつくりれいむは怒っていたのだ。

神社の信仰、霊夢の事で思いやりがある為、それが許せなかった。  
そして居場所を突き止め、今の現状に至るのであった。

妖怪はただ黙って見つめていたが、ゆつくりれいむは悲しそうな  
顔をして、その妖怪にこう言った。

「でもね……あなたが紅白の巫女に退治されたら、誰があんたの子  
供の面倒を見るのよ？」

「お、俺がバカでした…グスッ」

「ゆつくりさんは誰よりもお前やお前の家族のことを心配してんだ  
ぞ！」

「（……盛り上がってる……）」

なんか某不良高校漫画みたいな流れであるが、魔理沙は気にする  
ことも無かった。

しかし、ゆつくりれいむの意外な行動を見てちょっと驚いていた  
模様だった。

「……と、まあ、そんなことがあったんだぜ」

「あややや！貴重な意見、ありがとうございます。」

次の記事はコレですね！「ゆつくりれいむ！博麗神社の参拝客を  
助ける！」と……」

そう言って魔理沙の話は終わった。

早速、パパラッチは文花帳を取り出し、その事について書いていた。

霊夢はと言うとちょっとだけ微笑んでいた、普段は怠けて掃除サボって、着替えを覗いて、腋を舐めたりスカートをめくったりしているばかりのゆっくりれいむが神社のために参拝客を増やしていることを……

最近になって思えば、以前よりは参拝客が来るようになった。

ゆっくりれいむはただの疫病神ではなく、本当は幸せを運ぶ妖怪と思い始めた。

「……たく、余計なお世話ばかり……」

……が、次の萃香の一言でこの思いは崩れ始める。

「でもね、参拝客の中にはスタイル抜群の女性にセクハラしたりもしたのもあったな」

「……………」

オーケー、前言撤回。

やっぱあのアホ饅頭は疫病神よ!!。

霊夢は心のそこからそう呟いた。

自分で参拝客を減らすような行いをしているゆっくりれいむにかなりの怒りのオーラを出していた。

これを見て、魔理沙たちは若干、顔面蒼白になって霊夢から一步引いた。

その時、石段から、人影が見えた。

人のようだった、しかし……参拝客にしてはどうもおかしかった。

両手に担いでいるのは、大きなたらいだった。しかも息切れして  
いてハアハアと喘いでいる。

「なあ、アレって……まさか」

魔理沙が呟いたその瞬間、霊夢は真つ先にその人影まで走って  
いった。

「オイ！霊夢！待て！、あいつは！」

いきなり走り出した霊夢に魔理沙は止めようとしたが、時すでに  
遅し。

何故、走り出したのか不明であったが、文はぼつりと呟いた。

「おそらく霊夢さん、あのたらいの中にたっぷりとお賽銭を入れる  
お金があると勘違いしたのじゃないでしょうか？」

「あー、最近、お賽銭を入れる人少ないからね」

文の呆れた一言に、萃香は同情した。

一方、霊夢はと言うと、猛スピードで走って、その人物の目の前  
で止まった。

すると、顔を上げると満面笑顔で……

「ようこそ！博麗神社へ……」

ザバアアア！！

何かをぶっかけられた、それも赤い液体である。

ぶっかけられた霊夢は何をされたのかポツンと佇んでいた。

一見、血に見えたが、ほんのり甘い香りがしているのでトマトジ

ユースだった。

魔理沙達も霊夢に近づいてそのぶっかけた人物を見た。さらさらしていて綺麗な青色のロングの髪で、単発ズボンで柄の入った服を着ていて。

顔はかなり可愛い分類に入っている、目は赤と緑のオッドアイ、スタイルはかなり良く、胸は西行寺幽々子、八雲紫、八雲藍には負けるが中ぐらいである。

文はカメラを持って撮り続け、萃香はその少女の胸をじいつと見ていた。

そして魔理沙は驚きを隠せずに口をパクパクしていた。

若干、たらいを持っているただの少女であるが、人間とは思えないところがあった。

少女の首が、ちょっとだけぐらついたのである。

ぐらぐらする頭を少女はあわてて押さえた。

「お、お前まさか……死を呼ぶあの……」

魔理沙がそう言おうとした時に、霊夢からかなりの殺気が出ているのに気づいた。

そこには、ワナワナと怒りと殺意が入った鬼巫女の姿があった。

ゆっくりれいむの傍若無人やセクハラ行動、そして中々来ない参拝客、更にはたらいにいつぱい入ったトマトジュースをいきなりぶっかけられる……

などと霊夢の顔がかなり怖い表情になっていた。

こんな姿の霊夢はかなり初めてである、魔理沙たちはあわわわわ



アイストコンタクトであった。



惨殺！0話「やってきた見習いデュラハン」（後書き）

ゆっくりれいむ

「おいバカ作者、これ使いまわしだろ!？」

ソドー鉄

「いや、あの…実は新規で書きたかったのですが、時間の都合上書くの間に合いませんでした」

ゆっくりまりさ

「じゃあクイズ小説の方に連載してる奴はどうすんだ?」

ソドー鉄

「デュラ娘を連載してしまったので消す事にします。

次回からデュラ娘の話はこちらで連載していく方針です」

ゆっくりれいむ

「ふう…だから貴方はバカ作者なのよ、これだから感想も少ないのよ」

ソドー鉄

「ほっといてくださいよ!！」。

取り乱しましたが、次回に続きます」

デュラ娘

「……………次回、惨殺！1話「幽々子と妖夢との出会い」……………  
リリカルデュラデュラ…がんばりm…あっ…（ポロッ）」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3935ba/>

---

惨殺！デュラ娘

2012年1月10日08時46分発行